東方紅魔導　あり得た世界の物語

百合の戦士

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは君たちの知っている物語ではない。

レミリア・スカーレットは吸血鬼らしくない吸血鬼。

レミリア・スカーレットは魔女である。

レミリア・スカーレットには妹が二人いる。

始まりが少し違うだけの物語は、その性質を大きくかえ、また別の物語へと変わる。

目　次

その者、吸血鬼の魔女にて ―― 1
紫色の獣人 ―― 5
金と銀　破壊と再生　絡み合う様に、甘く、優しく、 ―― 10
楽園のススメ ―― 15
幻想はいつも脆かった ―― 20
幻想・ザ・ビート ―― 27
アヤカシ巫女 ―― 32

その者、吸血鬼の魔女にて

レミリア・スカーレットは悩んでいた。
「うーん、どっちのドレスが良いのかしら・・・」
この日の夜、とある魔女の屋敷にてパーティーが開かれ、そのパーティーにレミリアが招待されたのだ。
しかし、レミリアはこのような物になれてなく、更にパーティー用の服は二つしか持っていない。
青い、落ち着いたドレスか、赤い少し派手なドレス。
「こっち!」
すると妹であるフランは赤いドレスを指差した。
「こっちが良いと思う・・・」
するともう一人の妹であるロランが青いドレスを指差す。
「うーん、そうねえ」
そうして、レミリアは悩む。
そしてある案を思い付いた。
「どうせならくっつけちゃいましょ?」
「え?」
流石双子、フランとロランは全く同じタイミングで驚き、そして首を傾げた。
フフッ、と笑いながらレミリアは棚に入れておいた裁縫箱を取りに向かった。
その夜、赤と青で作られた清楚で、なおかつ魅惑的な、その様なドレスを着たレミリアがパーティー会場に現れ、魔女達の間で違う色で作られたドレスが流行り出した。
しかし、彼女は意図して行った訳ではなく、ただの気まぐれであったのだが。
ん?何かがおかしい?まあそうだろう。
何せこれは君達の知っている物語ではない、それどころか妹が一人増えている。
簡潔に言えば・・・

この物語は、始まりの歯車が少しずれた結果、何もかもが全く別の物になった物語。
おっと、説明はこれぐらいにしよう。
ほら、物語が再開するよ。

レミリア・スカーレットは少々特殊な吸血鬼である。
まず、彼女が物心付いたとき、バンパイアハンター達がスカーレット一族を皆殺しにするために行動しており、時には館にさえも侵入し、館を荒らし、一番ひどい時には使用人の吸血鬼が灰になった場面等も見たことがある。
そして、フランとロランが産まれ、バンパイアハンター達の侵攻も落ち着いてきた時、事件が起こった。
父親の死である。
あるハンターにつけられた傷が体を蝕み、そして・・・今まで取り込んで来た人間の血液が熱を持ち、父親を焼き殺した。
更にその血は父の側で必死に「死なないで!」と泣いていたレミリアの顔にべったりと父が吐血した血がこびりつき、そして、彼女は直ぐに「ああ、自分の父を殺したのはコレなのだな」と直感的に思った。
・・・それが人間の血液だとも。
それ以来、彼女は人間の血液に対してトラウマを持つようになり、彼女は現在でも人間の血液は飲まない様にしており、妹達にも飲んではいけないと言っている。
そして、当主である父が死んだとわかるとハンター達は本格的に攻め始め、その日に吸血鬼の中でも上位の貴族であったスカーレット家は終わりを迎える・・・はずだったが。
彼女達は生きていた。
母親に連れられ、人が恐れ全く足を踏み入れない魔の森へと逃げ込んだのだ。
そして彼女達は森の中でひっそりと暮らしていた。
母親は逃げている時に負った傷が原因で死んでしまったが、「穏やかに生きて欲しい」という母の遺言に従い人間に復讐しようとは考え

ず、ただの森の住人としてフランとロランを育てながら生活をしていた。
森に元々住んでいた魔女達ともいい関係を築き上げ、ついには魔女の力を持った。
のだが・・・
(フランとロランが魔法でケガしたらどうしよう?)
と思い最近まで危険だと判断した魔法を教えていなかったのだが、知り合いが
「もう子供じゃあないじゃろ、大丈夫大丈夫」
と魔法を教えてしまい、良く問題を起こしてしまうようになってしまった。
例えば
フランが浮遊魔法を使って天井に突き刺さって屋根からフランの頭だけ出ててつい笑ってしまったり、
ロランがベッドから物を取ろうとして転移魔法を使い頭に分厚い本を落としてしまい涙目になったり、
風魔法で薪割りしようとして風が切った薪を二人のおでこにぶつけてしまい、一緒におでこを押さえてたりと失敗を繰り返していたので仕方なく魔法をおしえている。
まあつまり・・・
かなり平和なのである。
その後森が開拓され、造られた街に移り住んでいた三人。
フランとロランは仲の良い友達(魔女や悪魔)と一緒に遊んでいて、レミリアは街で買い物や世間話等、
正直吸血鬼とは思えない生活を送っている。
一応レミリアは二人に自分達が吸血鬼の末裔的な存在であるとしか伝えていない。
ちなみに収入等は薬等を作り、それを売って生活している。
そんな平和な三人にちょっとした転機が訪れる。
「娘?」
「ええ、貴女の家であずかってくれないかしら?」

ここは街の魔女や魔法使い達をまとめる役目を持つノーレッジ家の屋敷。
その屋敷の客間で、レミリアはそのノーレッジ家の当主、エメリアと話をしていた。
以前に行われたパーティーもノーレッジ家が主催でこの屋敷で行われた。
しかし、そのパーティーの内容は明かされなかったが、何時もマイペースに紅茶を飲んでいるだけの彼女が自分から話かけていた為、何となく嫌な予感がしていたのだ。
ちなみにレミリアは何故か運命を操る能力ではなく才能を開花させるという能力を持っているのでこの展開は分からなかった。
「一体何故?まずそれを聞かないと判断出来ないわよ?」
「そんなに重要な事じゃないのよ、ただ友人に呼ばれてちょっと手伝いに行くだけ」
「・・・帰る時期は?」
「わからない、でも当主には有望な魔女に譲るつもり」
「貴女・・・」
「分かってる、でも」
そういって彼女は立ち上がった。
「いずれ、あの子や、貴女達の為になることなの」
エメリアの眼は真剣その物だった。

紫色の獣人

「フゥ・・・」

私がこの家に預けられ早二年。

あの日、私は理由を詳しく聞かされぬまま、このスカーレット家に預けられた。

レミリアは母の数少ない友人であり、私も良く面倒を見てもらったものだがまさか本当に面倒を見られる立場になるとは思ってもいなかった。

しかし、一応年上の筈の双子の姉妹に魔法や勉強を教えたりある程度の家事は（自分で言うのも何だが）つつがなくこなしているためあまり迷惑はかけていない・・・と思いたい。

そんな私だが実はあまり魔法は得意ではない。

教えるのは得意だ。

私が教えればどんなに魔法の腕前が無い者でもそこそこ上達させる自信がある。

しかし、だ。

流石に才能等はどうしても限界という物がある。

身体的なデメリットもだ。

私は生まれつき魔法を使うために必要な魔力を操る能力が致命的なまでに欠けている。

それを知ったとき、私は絶望したものだが、今は違う。

レミリアの何気ない一言で私は自身の別の才能に気づけたのだ。

「でも魔力は異常なほど集まってるわよ?」

それから私は調べた。

それはもう必死に、すがるように。

その結果、私はなんと、ありとあらゆる物からエネルギーを集める力を持っていることが分かったのだ！

魔力だけではない、熱も、運動エネルギーも、栄養もだ！

しかし、それは魔法には関係無いのでは?と思うだろう。私も思った。

だが、それは間違いだったのだ。

「パチュリー、これどう？」
「フム、これは違うな、薬草に見えるが単なる雑草だ」
「えと・・・これ・・・」
「残念だがそれは薬に使えないキノコだ。しかも不味い」
今私はフランとロランと一緒に森へとやって来ていた。
私達魔女や魔法使い等の隠れ里である魔法の街を囲み、外からの侵入を防ぐ役割を持つこの森だが、薬の原料等も豊富にある。
・・・一つ問題があるが。
この森は獰猛な獣や街から流れ出た魔力の影響で妖魔となった者達が生息している。
それらは時に材料等になるのだが、かなり危険な存在であり少なくとも二人がいるときには出会いたくない。
一応二人は弱くなく、むしろ逆で強いのだが、万が一ということもある。
たとえ強くとも危険にさらすわけにはいけないのだ。
「パチュリー！早く早く！」
「いっぱい取って、姉さん驚かす」
「ん？ああ、すまん今行く」
・・・というか時々忘れるが一応二人は年上なのだが。
といっても三年程なのだが、何故ここまで子供っぽいのか。
見た目が幼いと精神まで幼いのか、関係無いのか。
まあ子供っぽいほうが二人らしいし元気なのは良いことだ。
その後特に何事もなく採取を終わらせた私達だがあることにきずいた。
・・・帰り道は何処だ？
そういえば忘れていた。
私が重度の方向音痴だということを。
（どうする？一体どうする？）
今まで森に入ることは多々あった。

しかしそれらは全て友人達と一緒に行っていた。
だが今回は違う！
フランとロランの採取についていて欲しいとレミリアに頼まれ深く考えず了承してしまった！
帰り道も分からない、しかもちょうど日が傾いて来た頃だ！
どうする？いや、待てよ？
そうだ、私には物覚えのいい優秀な双子がいるじゃないか。
二人なら、道を覚えている！ああ、何ていったって私の教え子だしな！
二人を信じるんだパチュリー・ノーレッ「帰り道、どこ・・・？」「分かんない」
・・・え？
「でも大丈夫だよ！」
「そう、だね、私達にはパチュリーがいるし・・・」
・・・ちょ
「パチュリー！早く帰ろ！お姉ちゃんに怒られちゃうよ！」
う、
うう、う、う
「？パチュリー？」
「うおおおおおオオオオオ!!!」
「!?」
期待に、
教え子の期待に答えずして、何が私か！
全力で私は森からエネルギーを集め、そして、
自分の体に取り込んだ。
私は魔力を操る事が全くできない。
しかし、自分の体に取り込み、それを、自身の体を魔方陣として使用する為の燃料とする！
それが、私があみだした魔法、偽陣魔法！
そして私は体を強化する身体強化魔法を発動した。
この偽陣魔法、実はかなりの負担が体にかかるためある程度の体の

強度が求められる。
元々運動が好きで良く鍛えていたし、必死で特訓した結果、必要ラインの三倍を軽くこえる体になった。
正直魔法は要らないんじゃないか？とも思ったがそれでも私は完成させた。
結果・・・！

夕焼けに染められる空の中で獣が少女二人を抱え走っていた。
獣は完璧な獣ではなく、人の形は残しており、その美しく、勇ましい顔は真っ直ぐ、街を見つめていた。
獣の持つ長く美しい紫色の髪の毛は夕焼けを反射し、まるで宝石のごとく輝いていた。

ああ、もちろん私だ。
なんというか、身体強化をすると何故か術式に組み込んでいないのに獣人化してしまうのだ。
いやむしろ、なにか封印をはずしてるような・・・？
それは置いておくとして、獣と言っても手足に毛がはえて、尻尾と獣の耳もでるだけだ。
おそらく猫辺りだと思う。
それと普通の魔法は普通だった。
出来ないかは増しなのだが。
しかし、獣人化している時は自分でも驚く位自由自在に魔法が放てる。
だが流石にこの姿は恥ずかしい、そして何よりエネルギーを多く消費してしまい燃費が悪い為ならない。
・・・今回に限っては無我夢中だった。
本当に反省している。
とにもかくにも、何とか日が沈む前に帰ることができた・・・のだが、
今度は新しい問題ができた。

ヤバい、尻尾と耳が残った。

その後調べて見ると実は先祖に獣人がいたことが判明し、魔法で強制的に血を呼び起こしてしまい獣人として覚醒したとわかった。

「よかったじゃない、可愛いわよ？」

「あ、ありがとう・・・ではなく！どうすれば良いんだ!?コレ！」

「そのままで良いと思うんだけど？」

「絶対にいやだぁぁぁ!!」

その後一週間森に引きこもり、野生に帰る前にレミリアによって連れ戻され、結局3日で慣れた。

慣れって凄いな。

パチュリー・ノーレッジ　魔女及び魔法使い　　獣人

エネルギーを集める程度の能力

主に白兵戦を得意とし、更に自分の体から大量の魔法を放ったりして戦う。

普段は不完全な獣人であるが、身体強化をすると完全な獣人になれる、が少々の理性と体力が犠牲となるため本人はならない。

それと今更ながら魔方陣を普通に展開してそこに魔力を込めれば良いのでは？と考え実行したらうまくいった。

街では教師をしておりフランとロランも生徒である。

・・・それと少し戦闘狂な一面も。

基本的に何でもこなせるが重度の方向音痴。

まじめだがおおざっぱな部分も。

たまに魔法を開発するのだが、自分では使えない事がしばしばある。

趣味は筋トレと小説を書くこと。

困っている人を見たら助けたくなるタイプ。

金と銀　破壊と再生　絡み合う様に、甘く、優しく、

フランとロランを一言で表すなら対照的、だと思う。
見た目で言えば、フランは髪の毛が金色で目は赤、服も赤いのを好んでいる。
対してロランは髪の毛は銀色で目は青く、服も青い服を好む。
性格でもフランは活発で明るいのに対して、ロランは大人しく、静か。
そしてフランは勉強が苦手でロランは得意、でも運動はその逆。
そんな二人だが何をするにしても大体一緒にいる。
とても仲が良いし、遊んだり、一緒に寝たり、それは良いのだけど・・・
「最近私ちゃんと二人のお姉ちゃんでいられてるのかしら？」
「？どういう事だ？」
パチュリーはキョトンとしながら飲み物が入っているコップを置いた。
ある魔女が作った３０種類の薬草のフレーバーらしいが正直微妙な味だった。
パチュリーは私に渡したい物があるらしく、今日はきりのいい所で仕事を終えた。
私の仕事は薬を作って売ってくれるお店に納品する事だ。
そんな中、ふと気になる事がありパチュリーに聞いてみる事にしたのだ。
「いやなんというか、私最近二人との時間が余り取れてないじゃない？
最近新しい薬がどんどん売れる様になったけど、その分多めに造らなきゃいけないし・・・」
「確かに、最近工房にこもっている事が多いな、以前にも増して、だが」
「え？」
「おい、まさか自覚がなかったのか？」
パチュリーは怪訝な顔をして私の顔を見て、そして呆れたようにた

め息をついた。
「・・・フランとロランに最後に出会ったのはいつだ？」
「ええと、確か1週間前かしら？薬の納品でお店に行ったときに確か道ですれ違ったはず・・・」
「少し話をしようか」
・・・何かおかしな事を言っただろうか？
「まず、一つ」
「うん」
「何故同じ家に住んでいるにも関わらず毎日顔を会わせていないんだ!?」
「え？」
何故？何故かと言われればそれは・・・
「だって部屋から出てないし・・・」
「そこからか？私はお前にそこから教えなければいけないのか？」
「え、えっと、もしかしたら私はおかしいのかしら？姉として、失格なの？」
「・・・前から薄々思っていたが、今確信した。レミリア、辛いかもしれないがよくきけ」
パチュリーは静かに言い放った。
「姉失格だ」
「そん、な・・・！」
いや、確かに薄々気付いていた。
最近になってめっきりと話をする機会が無くなったどころか姉として妹の手本となる生活すら出来てないと。
昔は違った、昔は規則正しくを心がけ、毎朝の食事を作り、二人を起こしてから一緒に食事をしていた。
しかし、今はどうだろうか？
昼夜逆転どころか数日寝ないのは当たり前、妹とのふれあいよりも開発を優先する日々。
一体何時からだろう？
少しでも二人のためになるならとどんどん薬を作った結果、ついに

は二人との時間が無くなってしまった。
　こんなはずでは・・・こんなはずでは・・・
「しかし、だ」
「え？」
「まだ、やり直せる」
「まだ、やりなおせるの？」
「ああ、何せ、あの二人はまだお前の事を慕ってくれているんだぞ？」
　そういってパチュリーはここに来た目的であるとある物をだした。
「・・・？箱？」
　それは小さな箱だった。
「今日がなんの日か思い出せ、まあとりあえずその箱を開けてみろ」
　言われるがままに箱を開けると、中には・・・
「ネックレス？」
　赤と青の宝石のシンプルなネックレス。
　しかし何故か、とても大切な物の様に思えた。
　これは、もしかして・・・
「あの言葉は私が最初に言うべきじゃない」
「!!」
「あの二人はまだ、お前の事を好きでいてくれているんだ、なら・・・」
　その言葉を聞いた瞬間、私は工房から飛び出た。
「お前も、二人の期待に答えるべきだと思うぞ？」

　まぶしい。
　薄暗い地下にある工房から明るい地上へと出たとき、私は反射で目を閉じてしまった。
　そして、次に目を開けたとき、目に入ったのは・・・
　・・・ドアが当たり気絶しているフランとロランだった。
　誰でも分かる？簡単なあらすじ
「お姉ちゃんの誕生日だーー！」「いえー」
「とりあえず突撃しよーか！」「しよーしよー」
「じゃあドアの前で待機！」「イエッサー」

「3」「2」「1」
バンッ！
ゴッ！
ドシャア・・・↑今ここ

ゴメン、本当にゴメン・・・
と、その時、
「・・・た」
二人はむくりと起き上がり、
「!?」
「「誕生日、おめでとう!!」
そういって二人は私に飛び付き・・・
ゴッ、ガッ、ドシャア！
私は二人と一緒に階段から転げ落ちた。

その後、何だかんだあり、無事に誕生日会を行い、少し反省して二人との時間を作る努力をしようと思った、のだが。
圧倒的人手不足！
レミリアの作る薬の中には、魔力を回復したり、さらには実験や魔法に使ったりする物もあり、かなりの需要があるし今更作る薬の量を減らせないのだ。
どうしよう、薬の供給が追い付かない！
このままじゃ、街が薬不足に！
そんなときだった。
「赤と青の薬師、レミリア・スカーレットの家はここかしら!?」
救いの手が舞い降りた。

とある一族がいた。
その一族は闇の世界の中で有名な、違法な薬やかなり強力な毒薬を作り、そして闇商人に売らせている。

麻薬等もこの一族が開発した物だった。
そして一部のかなり効果や危険性の高い薬はこの一族にしか作ることが出来ないのだ。
何せ、この一族はある能力を持っており、その能力を使わなければ作れないのだ。
その能力は、時を操る、という力。
例え彼らを取り組もうとしても、その力によって逆に滅ぼされるだろう。
だがある時、その一族は滅んだ。
その理由はわかっていない。
有るものはこう言った、誰かが彼らを殺したと。
また有るものはこう言った、実は闇の世界に嫌気がさし、穏やかな日常を送っているのでは?と。

誰にも、理由はわからない。

楽園のススメ

「赤と青の薬師、レミリア・スカーレットの家はここかしら!?」
そういって彼女は家にやって来た。
見慣れない服装の少女だった。
まず、頭に見慣れない形の帽子の様な物を被っている。
髪はどこか美しいと心から思ってしまう長い金の髪の毛。
ただ、凄く焦っているらしく帽子はずれていて髪の毛はボサボサになっている。
「そ、そうだけど、貴女は?」
「私は八雲紫!、レミリア・スカーレットは!?」
「私だけど、何かしら?」
それにしても赤と青の薬師って何かしら・・・。
いつの間に変な通り名がついてのかしら?
「貴女に頼みたい事があるの!」
「頼みたい事?」
ええ、と言うと紫は手紙を出した。
それを受け取り読んでみると・・・。
「・・・あの薬を作って欲しい、ね」
差出人を見てみる。
「差出人はエメリア・ノーレッジ、何年振りよあの馬鹿」
本当にこりてないのね、エメリアは。
手紙の内容はただ単純に薬を作って欲しい、これだけだ。
しかし、その薬と言うのが問題で・・・
「何で私に喘息の薬を今更作らせるのよ」
「それが、私にも分からないの!何時もは自分で作った薬をのんでいるのに、今回はレミリアの薬では無いとダメだって言い出したの!」
「今のエメリアの様子は?」
「今は落ち着いてるけど、多分、もっとひどくなると思う!」
「・・・そう」
何を考えているのか分からない。

でも、
「それで、エメリアは今何処にいるの？魔法を使ってでも飛んでいく。」
ただ無意味にこんな事をするタイプではない、だからこそ、何かしらの理由が有るかもしれない。
なら、まずは聞きにいく。
これで何かあってもしもの事があるのはイヤだ。
「え？エメリアならすぐに連れてこれるけど・・・」
「なら早く連れてきなさい」
「わ、わかった！」
「・・・パチュリーを呼んでこよう」
「全く、母は一体何を考えている!?」
パチュリーは怒っているが、気持ちは分かる。
少しして連れてきた！と紫がやって来た。
エメリアの顔を見て、パチュリーが何か言おうとして、絶句した。
「大丈夫エメリア!?」
「ゲホゴホ、だ、大丈夫～（棒）」
びっくりするほど下手な演技だったから？違う。
こんな演技でだまされている紫に対して？それも違う。
パチュリーと瓜二つな人物がエメリアの隣にいたからだ。
治療をするからと紫を追い出したらスンと喘息の演技を止めた。
「ごめんなさいね、嘘をついてしまって」
「え？あ、うん、大丈夫よ、何となくわかったから」
「だが私は納得しないぞ!?説明してくれ！」
そうね、と言ってエメリアは話始めた。
「まず、パチュリー、貴女に伝えなければいけない事があるの」
「な、何だ？」
「実は私は貴女の母親じゃ無いの」
「え？」
「具体的に言えば私の妹の子供で、妹は世界を旅する旅人なの」
「ま、待ってくれ！じょ、冗談だろう？」

「いいえ、冗談じゃ無いの」
何故だろう、嫌な予感がする。
「貴女は妹がある町に行ったときに孕まされてできた子供なの」
「しかも意外と重い!?」
「その町で町長に目を付けられて、家に泊めてくれるということで妹は町長の家に泊まった。
でも、町長は魔女だった。魔法で拘束され、ここでは言えないことをされたらしいの。
妹は魔女じゃなかったから魔法をどうにかできなかったし」
「ん？魔女？」
「ええ」
「あー、母よ、男の魔女っているのか？」
「いいえ？」
「では私は女と女の間に産まれた子供なのか？」
「ええ」
「何だそれ!?」
「パチュリー」
「何だ？」
「世の中にはね、いろんな魔法があるのよ」
聞いているだけで頭が痛い、私関係無いのに。
「それとね」
「まだあるのか!?」
「これから貴女達引っ越すわよ」
「「は？」」

話を聞くと、どうやらエメリアが手伝いに行った理由でもあるのだが幻想郷と言う妖魔や否定されてきたもの達の楽園を作るという紫に共感し、今まで頑張ってきたらしいが、最近になって何とか安定してきたためここごと転移させるらしく、サプライズのノリで何故か私とパチュリー以外に話がまわっていたらしい。
ついでに幻想郷には私と同じ仕事をしている人達が仕事不足だか

ら丁度いいかもしれないとの事。
と言うかそこまでいっていると私に拒否権はないと思うのだけど。
「・・・いろいろ言いたいがまあいい、それより、だ!!」
そう言ってパチュリーはエメリアの隣にいる少女に視線を向けた。
「母よ、説明してくれ」
「ああ、この子？この子はパチェリー、妹の娘よ」
「確かに、それなら似ていることも納得ね」
「勝手に納得しないでくれ・・・」
「ええと、はじめましてかしら？私はパチェリー、貴女がパチュリーね？」
「・・・ああ、これからよろしく頼む」
その後、私達は街ごと幻想郷に引っ越した。
でも、私は何故か、騒がしい日常になりそうだと、思った。

八雲　紫　　幻想郷の管理人
とても純粋かつ騙されやすい少女。
能力は境界を操る程度の能力。
普段あまり人前に出ることは無いが、しかし幻想郷の皆からは慕われている。
ただあまりにも甘く交渉等がかなり不得意な為、交渉等は部下に任せ自身は幻想郷の管理を行っている。
友人がかなりの大物や癖が強い者ばかりなのはその立場だからなのか性格を気に入られているか、運命か・・・
何千年と生きてきた妖怪だが、それでも純粋なのは友人達のおかげ。
趣味は日傘集めと高級なお酒や茶葉の収集。
でも勿体なくて中々開けれない、使えない。
のほほんとしているが実力はけっこうある。
でもあまり戦いたくない模様。
だからなのか弾幕ごっこのような本気ではない戦いを考案した。

かなりネガティブで自信がなく、いつも自分を責めようとするが、たまに変なところでポジティブになる。
スペルカード
強欲「存在意義」
偽善「皆の為という嘘」
境目「人と妖」
零符「孤独から救ってくれた貴女に」

エメリア・ノーレッジ　幻想郷の魔女
パチュリーの母にしてレミリアの長年の友人。
いろいろ自由な人。
人を困らせるのが好きな厄介な人。
幻想郷では「胡散臭い」「信用できない」等散々な言われようだが何だかんだで信用されている。
・・・ここだけの話実は異変を何個か起こしている。
喘息を持っているのが弱点と言えば弱点、ただし軽度で我慢もできるレベル。
かなりのポジティブで紫にポジティブな部分があるのもこの人のせい。
スペルカード
遊戯「魔女のゲーム」
協議「魔女裁判」
魔法「裁きの業火」
魔法「エレメント・マジック」
「ノーレッジ家の秘術」

幻想はいつも脆かった

幻想郷には博麗の巫女と言う幻想郷を守る者がいる。
この幻想郷には博麗大結界という結界があり、それが無ければ幻想郷は形を保てない。
だからこそ、その博麗大結界を張り、守る巫女が必要となる。
その巫女こそが、博麗の巫女である・・・のだが。
実は問題がある。
今代の博麗の巫女は三人いる。それはまだ良い。
しかし、
長女の博麗霊夢は全てにおいて厳しく、皆から恐れられている鬼巫女であり、
次女の博麗小夜は全く人と関わりを持たず妖怪の味方である妖怪巫女で、
三女の博麗占歌は何故か吟遊詩人を目指している変わり種なのである。
今回はそんな三姉妹の長女の物語である。

「〜〜〜〜〜♪」
占歌、何か良いことあったのかな？
今日のご飯は多分良いお味噌を使ったお味噌汁だろうな。
「あら、占歌、何か良いことがあったのかしら？」
「あ、小夜姉！」
「・・・」
二人は楽しそうに話してる。
本当は私も話たい。でも、楽しそうに話してる人に割り込むって難易度高いと思う・・・。
「ハァ・・・」
「・・・！」
思わずいろいろ悲しくてため息をついたら二人がビクッてして恐る恐るという感じでこっちの様子をうかがってきた。

「ご、ごめんなさい！姉さん！」
ああ、占歌、良いのよ、謝らなくて、むしろ私が悪いのよ・・・。
と言うかどうして小夜は小夜姉なのに私は姉さんなのかしら・・・。
「姉さん、私が悪いの、私が占歌に話しかけたから・・・」
「ちょ！小夜姉！」
と言うかどうして話程度で私が怒ると思われてるの？
「・・・早く食べなさい」
「はい」
ああ、こんな言葉しか言えない自分が憎い・・・私だって姉妹同士での朝の会話をしたいのに・・・。
私のせいで雰囲気が暗い・・・、私って本当にダメね、ああ、前々から思ってたけど二人とは別々で暮らそうかしら。
ご飯を食べた後占歌と小夜は出かけて行った。
私はそもそも出かける用事もないし私が行ったところで皆の邪魔をするだけだもの・・・。
それに私は友達が少ないのよね。
いるとしても立場がとても高かったりそもそも場所が分からなかったり、おいそれと遊べる仲じゃ無いのよね。
「悲しいわぁ・・・」
自分で言っててとても悲しくなってきた。
と言うか私がいるせいで神社に人も来ないし、だからといってどこか行けばそこに迷惑が・・・。
そう考えていると、ふと、私は思い出した。
「そう言えば最近幻想郷に街ごとやって来た人達がいたわねぇ・・・」
もしかしたら来るかもね、何て考えて私はフフッと笑ってしまった。
「何てね、そんな丁度よく来るはずが・・・」
ない、という前に、四人の少女達が階段を登っているのを見てしまった。
「」
「あ、こんにちわー！」

「どうも・・・」
「はじめまして、最近幻想郷にやって来たレミリアと言います」
「貴女が博麗の巫女か？三人いると聞いたのだが・・・」
「ふぇっ!?あ、ああ、あの！二人はちょちょちょっとできゃけてて！」
(((噛んだ)))
うあああ！ひ、人だ、久しぶりの人だ！
わ、私妹以外と喋ったの何日ぶりだろ!?あああそれよりもお客様の前でとりみだしちゃったあああ！
「えっと！あの、その！うわわあああ、す、すいませんーーーー!!」
私はその場から逃げ出した。
(((ポカーン)))
その場に取り残された四人は固まっていた。

「ねーパチュリー、オサイセンってどうやるの？」
「うーむ、すまない、私も分からないんだ」
「・・・巫女さんよぶ？」
「うーん、大丈夫かしら？今呼んでも・・・ん？」
レミリアの視線の先には、神社の影に隠れこちらを見ている霊夢がいた。
しかし視線に気づくとサッと身を隠す・・・がチラッと顔を少しだけだしレミリア達を見ている。
心無しかソワソワしているようだ。
「・・・巫女さーん」
「ひゃ、ひゃい!!」
彼女に尻尾がついて入ればちぎれるほどブンブンふっているだろう。
それほど嬉しそうにわたわたと出てきたのだ。
「あっ」
しかし急ぎすぎて石につまずいてしまった。
「・・・」
「え、えっと、大丈夫？」

フランは心配になり声をかけると、恥ずかしかったのか顔を真っ赤にして立ち上がり何事もなかったかの様に説明を始めたのであった。
「ありがとう！巫女さん！」
「オサイセンのやり方複雑、でも教えてくれてありがとう」
「い、いえいえ！こ、こちらこそお賽銭をもらっているから感謝するのはこっちの方です！」
「ところで巫女さん、貴女の名前は？」
「うえっ!?わ、私はっ！博麗、霊夢ですっ！」
「そう、霊夢さん」
「はいっ!!なんでしょうか！」
「また来ても良いかしら？」
「」
「？霊夢さん？」
　すると霊夢は全身を真っ赤にして
「はい、良いですよ！」
　と言ったあと逃げ出した。
「うーむ、人見知りなのか？」
「巫女さん、可愛かったね。」
「うん！また遊びにこよー！」
「フフフ、そうね、また来ましょ？」

　博麗霊夢は単に、人とのコミュニケーションに難があるだけの少女である。
　ただ、その持って産まれた威圧感と・・・有るもののせいで勘違いされている。

「・・・」
　周りには鬼。
　場所は地底である。
　とある理由により、霊夢は地底に・・・旧地獄へとやって来た。
　鬼の数は5。

「・・・来なさい」
その言葉で鬼達は霊夢へと向かって行った。
「オラァ！」
一体の鬼が自慢の腕力で殴りかかる。
「・・・・」
しかし霊夢はその一撃を片手で受け止め、グチャリと、鬼の拳を握り潰した。
「てめえ！」
また別の鬼が鉄の棍棒で殴りかかる。
「・・・汚い」
しかし全く怯まず、それどころか視線をずらさず鬼の拳を握り潰した右手を見て、棍棒を持った鬼の目に的確に、肉片を飛ばした。
「ウグッ!?」
一瞬怯んだのもつかの間・・・
「・・・軽いわぁ」
鬼から一瞬で棍棒を奪い、更に鬼の後ろへと回っていた霊夢は呟く。
「・・・この棍も、貴方達の命も」
霊夢は片手で棍棒を振るい、鬼の顔を吹き飛ばす。
ついでに切り返しで横にいた鬼をあえて殺さず、吹き飛ばす。
そして棍棒を投げ、手を潰した鬼の頭に棍棒がめり込んだ。
残った二人の鬼が自身を奮い立たせこちらへ迫って来たが、意にも介せず霊夢は呟く。
「・・・・起動」
すると、地面は輝き、地面から何十もの巨大な針が飛び出し鬼達を貫いた。
・・・地面には肉片や血で簡易的な陣が組まれていた。
「・・・と、終わったわ」
先ほど死んだ鬼達だが、事前に周囲に結界を張っていて、その内容は魂をその場に留めるというもの。

妖怪にとっての死とは精神の崩壊。しかし、鬼はどちらかと言えば肉体に精神が依存している。
魂が無くなると言うことは精神が無くなる。
そして体が崩壊すれば魂が放出され・・・「死」を迎える。
逆に言えば魂さえ有れば生き返る事も可能であり、今回霊夢はその事を利用して鬼達の体を完全に直してから魂をまた体へと入れた。
「さて、と」
霊夢は立ち上がり、目的に向かって飛んでいった。
この戦いを引き起こし、悠々と酒を飲んでいる鬼の大将へ向かって。
有るものとは、その恐ろしき力である。

ちなみに今回の戦いは地底にしか無い物を買いに来た霊夢に絡んだというしょーもない理由だったりする。

博麗　霊夢　　楽園の鬼巫女
幼い頃から妹達を守る為に様々な妖怪達に鍛えてもらい、今では立派なコミュ症となった少女。
友達がいないし作れない、更に誰も近寄って来ないという、完璧なボッチ。
かなりの威圧感を持っていてそれのせいでいろいろ苦労している様だ。
ただあまり人とのふれ合いが無いからか子供っぽい部分が少しだけある。
本性は一回出した人には遠慮なく出せるが、妹達が未だに本性を知らない程出ない。
ちなみにほ彼女の本性を一回知った者は普段の彼女との付き合いがよっぽど長くない限り普段の状態でも何となく色々察することができる。
身長はとても高い。ただし胸は普通。

かなりの実力を持つ。が、あまり戦いは好まない、のに一度戦いになると少し性格が好戦的になる。
戦闘時少し口調が変わるのは霊夢の師匠の口癖が戦闘の時だけ移ってるから。

スペルカード
護符「退魔結界」
理「森羅万象の理」
「夢想封印」
神話「天照の御隠れ」

幻想・ザ・ビート

「フフフ・・・」
私は今、とても上機嫌だ。
何せ、産まれて初めてマトモな友達と言うのができて、尚且つ今日遊ぶから！
さて、妹達は空気を読んでくれたのかご飯を食べたらすぐに出掛けていった。
・・・別に二人もいて良いのよ？
「霊夢、来たわよ」
「あ！今行く！」
今日来てくれたのはレミリアちゃん！
小さい体に似合わない母性を秘めた女の子で、魔法の街（レミリアちゃんの住む街）で薬屋さんをしているみたい。
「おはよう霊夢、妹さん達は？」
「それがねー、いつもみたいにどこか行っちゃって・・・といっても巫女の仕事だろうけど」
「へぇ、仕事熱心なのね」
「うん！私の自慢の妹だし、良い子達なんだよ！」
「フフ、霊夢が言うならとても良い子なんでしょうね」
なんだろーなー、レミリアちゃんと話してるとどんどん頭が柔らかくなるよ。
ってハッ!?
まずい、レミリアちゃんの気に当てられてちょっとだけ幼児退行しちゃってた・・・。
いや、遊ぶ時ぐらい少し緩くても良いかな？
「そういえばレミリアちゃん、お薬見せてくれるって言ってたけどどんなのがあるの？」
以前レミリアちゃんが来たときにレミリアちゃんが薬屋さんだと知って、どんなのを作っているか聞いてたら実物を見せてくれる事になった。

そして今日、レミリアちゃんはいろんなお薬を持ってきてくれた。
眠れない時に飲むと体がぽかぽかしてぐっすり眠れる飲み物とか、風邪にきく薬、中には失った腕も再生できる薬とかもあった。
「凄い！レミリアちゃんって凄いね！」
「フフ、ありがとう」
本当に凄いなー、レミリアちゃん。
私何て戦いしかできないし、レミリアちゃんみたいな良いお姉ちゃんじゃないし・・・。
「・・・ねえレミリアちゃん」
「？何かしら？」
「ちょっと悩み聞いてもらえないかな？」

一方その頃、博麗占歌は悩んでいた。
最近姉さんが上機嫌だ。
ただそれだけならまだいい、問題は最近姉さんとよく会うお客さんだ。
といっても私はまだそのお客さんを見てないけど。
話を聞く限り（勇気を出してそれとなく聞いてみた）最近幻想郷に街ごとやって来た魔女らしい。
あの姉さんが久しぶりにできた友人だと言ってたけど、あの姉さんの友達って絶対恐ろしい魔女だよ絶対！
まあでも近づかないに越したことは無いんだけど・・・
今日の演奏その魔女が住んでる街なんだよね!!
一応説明しておくと私は吟遊詩人のような、演奏しながら歌う事を一応副業でやっている。
・・・姉さんには信仰の獲得の為って言ってるけど。
小夜姉にも説得を手伝ってもらって一言もしゃべらなかった姉さんから「好きにしなさい」と許可？をもらって活動している。
そして各地の演奏で遂にお店とかでの演奏の依頼がくる様になったけど、今回はあの姉さんの友達の住んでる街、幸いその人は今神社に来てるらしいし、多分会う確率は低いと思うけど、まだ不安要素は

ある。
どうやらその人には妹がいるらしい。
つまり、だ。
もしかしたらとても恐ろしい妹かもしれないし会うかもしれない！
例えば全てを破壊できる能力を持ってたり、余りの力で地下牢に入れられてたり！
あ、でもそれだと脱け出せないよね。
「でも！聴いてくれるなら皆平等！例え恐ろしい人でも音楽好きかもしれないし、頑張らなきゃ！」
気合いを入れて、私は演奏の依頼を受けたカフェに足を踏み入れた。

「あ、ロラン！あの人かな？」
「きっとそうだよフラン、あの人が吟遊詩人さんだよ」
ステージに上がると双子（だと思う）女の子達が私を見て目をキラキラさせる。
ああ、そうだ、あんなに小さい子達が楽しみにしてくれてるんだ。
期待に答えないといけない！
さあ、始めよう、私の演奏を！

演奏が終わり、更にアンコールが重なって予定よりも終わる時間が遅くなってしまった。
（でもまだ帰るには早いかな？）
多分だけど姉さんの友達さんはまだいると思う。
（それじゃここで何か頼んで時間を潰そうかな？）
そんな訳で席に座って、何を頼もうか考える。
（そういえば、あの双子が食べてた甘味、美味しそうだったな）
そんな訳で店員に頼もうとすると、
「すいません、実はあれはまだ試作品でして・・・オーナーがどうしてもと言うので特別に出していた物でして、まだ販売は・・・」

「そうですか・・・」
　というかオーナー?まさかね、多分そのオーナーさんの娘さん辺りだろうな。
「あのー、すいませーん!」
「・・・サイン下さい」
「え?あ、はい!」
　さっきの子達だ!演奏も楽しんでくれてたし、吟遊詩人として一番嬉しいのがこういうのだと私は思うな。
　すると、銀髪の子が何かチケットの様な物を手渡してくれた。
「えっと・・・?」
「それ、今度このカフェでやる新作スイーツバイキングの無料券、ちょっと待遇も良くなるよ」
「よかったら来てねー!いこ、ロラン!」
「うん」
(ポカーン)
　え、えっと、つまり良いもの貰えたって事なのかな?
「えと、店員さん、あの人達って・・・?」
「あの人達がこのカフェの、いや・・・」
　店員さんは首をふった。
「あの方達がこのカフェのオーナーであり、ここら辺の建物のほとんどを所有するスカーレット姉妹です。
　ただ、経営は貸しているだけなのであの人達はしてませんし建物の管理等も他の専門の人がやっていますが。
　ちなみにああ見えて５００近く生きている魔女ですよ」
「えええええ!?」

博麗　占歌　　幻想にビートを刻む巫女
博麗の三姉妹の末っ子。
姉妹の中では最も巫女としての才能は無いが人間妖怪問わずに人気が高い。

性格は少し純粋で感情豊か、あまり戦闘は好まず話し合いで解決しようとする。
よく様々な場所で演奏を行っている。
使用楽器は河童特製エレキギター。
吟遊詩人とは。
たまにいろんな音楽チームと組むこともあるが大体はソロで活動している。
最近フランとロランと仲良くなったもよう。
スペルカード
序曲「スタート・ミュージック」
栄光「路上のミュージシャン」
進化「後戻り等存在しない」
勇気「自身を貫け☆ミュージックガール」
「ラストソング」
アンコール「まだまだ消えぬ夢と共に」

アヤカシ巫女

「私、妹達とあまり仲良く無いのよ・・・」
私はレミリアにそう言って事情を説明した。
するとレミリアは、
「なら、いい方法が有るわよ?」
と言って変な薬を出した。
首を傾げる私にレミリアは、
「素直になれて、怖がられなくなる魔法薬よ」
と言ってくれた。
怖がられなくなる何て私の求めてた物その物だ!
「ただって、ちょ、霊夢!」
私はレミリアの手からその薬を奪い、飲み干した。
・・・体が何故か熱くなってきた。
薬瓶のラベルにはウィスキーと書いてあった。
レミリアは後に語った。
「ほら、思い込みでただの団子でも薬になるじゃない?だから薬だって言って渡したのだけれど・・・。
まさかああなるなんて思ってもなかったのよ」

さて、神社で大変な起こっているとは露知らず、小夜は妖怪の山に来ていた。
そして妖怪の山の滝の裏にある家にて。
「・・・こんな所ばかりに来るから妖怪の味方と言われるのでは有りませんか?」
「味方も何も、一緒にいたい人と一緒に居て何か言われる筋合いは無いわよ」
「全く、貴女と言う人は・・・」
呆れてる風にしているけど、尻尾が嬉しそうにパタパタしてるから隠しても意味ないのに。
「嬉しいなら素直になりなさいよ、もみじ」

「ひゃうっ!?」
　相変わらず頭なでごごちが良いわね。
「ちょ、さ、小夜!や、止め!」
（モフモフ）
「ふああ・・・クーン・・・、ってち、違っ!」
「全く、可愛いわね、もみじは。と言うかどーせ暇でしょ?あなた別に何も仕事してないんだし」
「くう・・・違う!んぅ、私はここでっ!人里のお!、警備を、してっ!」
「あら、今日は耐えるじゃない、それそれ」
「クフウウ・・・、んんっ・・・」
　よしよし、だんだん目がとろんとしてきたわね、それじゃ
「それ!」
「ひゃあああああ!?」
　やったやった!もみじの尻尾モフモフだ!
　かなりさわり心地が良いくせに全然触らせようとはしなかったからね。
　それに今まではもみじが寝てる時にしか触れなかったし!
「さ、小夜ぉ・・・」
　・・・あれ?
　ちょっと待って何かおかしくない?
「もぉ、私、我慢が、できないよぉ・・・!」
　待って待って待って!あれ!?どうし・・・あ。
　そう言えば尻尾って動物にとって・・・「小夜!」
「ちょ!もみじ!」
「小夜が、悪いんだからな?」
「待って、待って!流石に!一回落ち着いて!ね!?」
「ダメ、それに小夜が今まで尻尾触ってたの気づいてたんだからな?」
「!?」
「その分、仕返しをさせて貰うぞ・・・?」
　うあああああ!!た、助けて!私の自業自得だけど誰か!助けて!

「だ、ダメです！」
「え？」
「このあとギクシャクしますからぁぁ！」
　そう言って謎の女性がドアを蹴破り見事な回し蹴りで私に迫っていたもみじを壁に叩きつけた。
「だ、大丈夫ですか!?」
「あ、はい、ありがとうございます・・・？」
　と言うか誰？この人？
「あ、あの！」
「はい？」
「本当にすいませんでした！」
「え？」
　話を聞いて見ると、実はある異変が起き、その異変の影響のせいで恐らくもみじがあんな感じになったと思うとの事。
　と言うか今思えば私も少しおかしかった気がする。
「で、その異変って誰が起こしたか分かる？」
「はい、えと、実はですね・・・私の兄が起こしたんです」
「お兄さん？」
「はい・・・」
「と言うかどんな異変なの？」
「それが、その、言いにくいんですけど、」
　とモゴモゴしながら彼女は呟いた。
「同性同士の恋愛を大量に生産と言いますか・・・」
「はい？」
「兄はフラグを作っただけ、とか言ってますけど・・・」
「そ、そう」
「それより、確か貴女は博麗の巫女さんですよね!?」
「そうだけど、もしかしてお兄さんを退治して欲しいとか？」
「はい！絶対退治してください！」

もみじ　妖怪の山の大剣豪
白狼天狗なのに組織から抜け出し一人で生活をしている珍しい白狼天狗。
その実力は並大抵の妖怪達は敵わないほど。
幻想郷で最も剣の腕前に優れていると言われており、ある大妖怪と（しぶしぶ）戦い勝った程。
小夜に好意を抱いてはいるがあくまでも友人に少し毛がはえた程度。
今回は異変の影響のせいでおかしくなってしまっただけ・・・だと思いたい。
名前は昔捨てた。
今では適当にもみじ、と名乗っている。
能力は千里先まで見通す程度の能力。
ちなみに霊夢の本性を知っている数少ない人物。

スペルカード
剣技「白ノ流ルルママニ」
剣技「黒ニハムカイテ」
剣技「白ト黒ガマザリテ」
秘技「　白と黒　」

博麗　小夜　幻想の妖怪巫女
幻想郷の二人目の巫女にして妖怪と仲がいい巫女。
ただ本人は贔屓している訳ではなく、ただ友達と一緒にいるだけ。
自身を偽り、利益を追及して他人を蹴落とそうとする人間よりも真っ直ぐな奴等が多い妖怪と友達になった方が楽しいと言うのは彼女の理論。
自分を本当に、ただ肩書きも関係なく評価してほしいと言う願いを持っている。
ある意味三姉妹の中で一番真っ直ぐで、一番自分にも他人にも正

直。
他人の肩書きだけで決して相手を決めつけないのは自分もそうして欲しいと願っているから。
若干人間不信気味。
スペルカード
孤独「立場故の独り」
願い「平等世界」
「力も持たず、夢すらも持たず、あるはただの欲望」
人「ライアーライフ」
アヤカシ「素晴らしき阿呆共」